

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第182号（2021年7月）



白井啓治

（二） 人生は自分のために

（2008年8月21日）

『わかれ道 さてどっち行く』

何時もの散歩道には、幾つかのわかれ道がある。たいがい迷うことなく、その日の気分で無意識にどちらに行くかを決めていく。しかし、まれにではあるが、右の道を少し進んで、急に左に行きたくなくて引き返すことがある。何故、急に道を返したくなったのかの理由などない。それこそ何となくである。

また、時にはわかれ道に立ちどまり、さてどっち行くか、と迷うこともある。何か考え事をしていて、どっち行くかの決断が出来なかったのかというところでもない。何となくである。

人生も振り返ってみると、幾度もわかれ道があり、その都度どちらかを選択して現在の状況に至っている。

人生はやり直しができない、だとか人生には「たら・れば」はない、とよく言われる。確かに消費した時を元に戻す事は出来ない。しかし、「たら・れば」を思ったら、その時点からやり直しは出来

る。その結果、時間が足りなかったな、ということはあるだろうが、実際のところは時間が足りなかったなと思う時点が、やり直しの到達点なのだから、その現実が自分の才能なのである。だから、もつと時間があつたとしても今以上のことにはならないといえる。



（絵：兼平智恵子）

今、自分の人生を振り返ってみると、やり直しの連続のようなものだったといえる。何度もやり直しを繰り返しているが、そのことに後悔するものはない。後悔の念のようなものが起こったら、またやり直すからである。

自分の人生は、自分のためにあるのだから、自

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

分のために使うのであれば、何時からだって遅すぎるということはない。寿命の長短でその人の幸せを尺度できないのと同じで、やり直しの時間が短いので大成できないということはない。自分の人生を自分のために使うのであれば、その時点で自分にとってのやり直しの大成である。

それで、何時もこう声している。「あなたの人生はあなたのものですよ。あなたのためにお使いなさい。私は、私の人生を私のために使います」

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

地域に眠る埋もれた歴史(70) 木村 進

「6 真家・瓦会・有明地区」(1)

6.1 大澤山明円寺 真家1055

明円寺は親鸞聖人の二十四人の弟子 第九番 明法房(すわち山伏弁円)により仁治元(1240)年に開かれたと伝えられる寺である。板敷山の麓に建つ大覚寺は親鸞聖人と山伏弁円との足跡を残す「法難の遺跡」として知られる。親鸞の19番目の弟子となった明法房は、69才の時、額田に上宮寺を建てて浄土真宗を広めたが、晩年になってそこを明教房に譲り、思いの出の真家村に一字を建て、明法房の「明」と弁円の「円」の字をとって「明円寺」としたとされます。



明法房は天明6年(1786)73歳で入寂したと

されています。また熊野権現と日光権現との二社を明円寺の境内に安置していたとされるが、現在はありません。また、天明6(1826)年に山津波のため本堂、庫裏が800m下まで押し流されたため、建立された当時はもう少し山の上側に立っていたそうです。その後復旧した堂宇も安政元年(1848)の正月24日、山火事で消失し、今の堂宇は慶応2年(1866)の建立といえます。ここ明円寺の脇の山道を少し登ると「馬滝」という園部川源流の幻の滝があり、ここは弁円の行場とも伝えられています。また近くの「鳴滝」も弁円ゆかりの滝とも言われています。真家地区には毎年8月15日に「みたま踊り」という盆踊りが行われる。

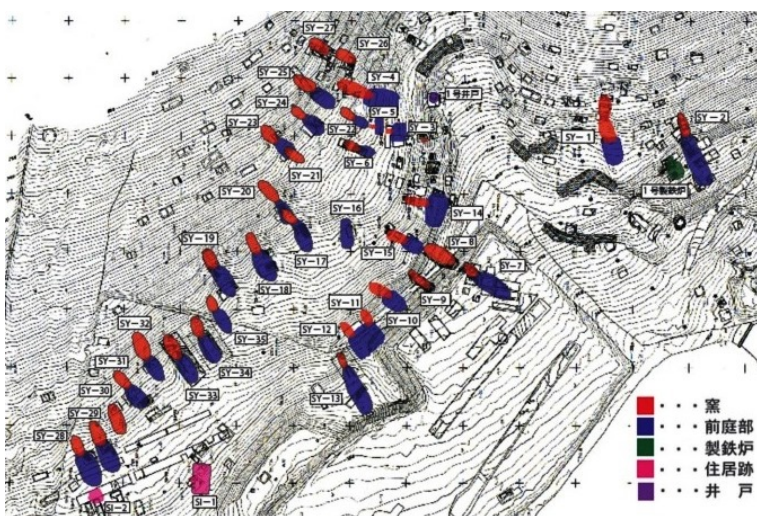
寺の脇は竹林とその中を川が流れており、石岡の境界を流れる園部川の源流となっています。

6.2 瓦塚窯跡 石岡市部原604

国指定史跡 平成29年10月13日指定

この遺跡は奈良時代の天平13年(741)常陸国の国府に国分寺・国分尼寺(石岡市府中・若松周辺)等を建立した際、その屋根に葺く瓦類を製造した窯跡といわれています。昭和43年、隣接している山林を開墾中に七基の窯跡が発見されました。そこで緊急の発掘調査を行った結果、窯の構造は粘土質の地盤をくり抜いて作ら

れた「地下式有段登窯」と判明しました。燃焼部と焼成部の区別が極めて明瞭で、焼成部内は五段に造成されており、布目瓦などの多くの古代の瓦類が出土しました。現在は35基の窯跡が確認されており、7世紀から10世紀と操業期間が長く、国分寺の瓦のほぼ全てが確認されるという種類の多さ、郡域を越えて、信太郡・下君山廃寺や那賀郡・台渡里廃寺、新治郡・新治廃寺などで確認される分布範囲の広さ、その保存状態の良さから、古代の窯跡としては日本有数のものと評価を受けています。



上の図は平成29年8~10月のふるさと歴史館で行われた第十一回企画展の資料からお借りしています。

この図面は左側が北であり、中央に谷が存在し、山の斜面が南西側を向いていて、温度を上げるために日当たりのよい斜面に窯を設置しています。また、遺跡付近には国府に向けて瓦会街道が通じており、ここから国府までは直線距離で約10 kmです。



窯跡は小山の入り口にあり、屋根がかけられ保存されている。

海外旅行の思い出(2)

木下明男

ソ連滞在記2

私の労音時代(今から30年ほど前の話) 4度目のモスクワだが晩秋に来たのは初めて(年末2回、夏に1回)市内はもう冬の寒さだった。今回の訪ソは、「モスクワ音楽劇場バレエ団」と「民族アンサンブル・ラウルコサック」との

交渉を進めるためだ。モスクワ滞在中のホテルは、外務省の向かい側にあり、ベルグロード道路を挟んでツインになった20階建ての建物。仕事の話を話しても面白くないので、滞在中に感じた市民生活について語りたい。閉ざされた社会(社会主義的統制)だし、観光ビザでの入国では、真の市民生活を窺えないが・・・。

モスクワ滞在中はすべて車移動、市内は革命記念日(11月7日)で大渋滞が発生していた。車の量が多くなっているのか?(前3回訪ソ時は、こんな渋滞はなかった)モスクワ市内中心部の道路は広く、片側6車線もある。それなのに、センターラインが見えず怖い思いをした。(元々境界線が無いのか消えてしまったのか分からない)制限速度(80キロ?)も速く、急ぐ車は左右に車線変更を繰り返して、サーカスマがいの運転で、見ているとハラハラの連続。殆どの道路は舗装されていたが、傷みが激しく彼方此方で穴が開いており、相当な揺れ方だった。車の通行は右側、交差点の信号は充分に設置されており、良く守られていた。しかし車優先の考えなのか、歩行者がいても車は止まらず、大変危ない。道路が大変広いので横断歩道はなく、地下通路が設置されている(歩道橋は皆無)。交通事故は大変多く、6日間の滞在中目撃した事故は7件もあった、然も私たちの車が追突されるおまけ迄ついた。市内を走っている車の整備状況も最悪、道路の真ん中で故障(エンジン?)し停まっている車を再三再四目撃(車検がないとか?)。モスクワの街は全体的に暗い(霧囲気ではなく)本当に暗い街並みだった。そして行き交う車は、ヘッドライトを付けず、

スモークライトで走っている車が多かった。

市民の足の中心は、地下鉄やバス(トロリーバスもあった)郊外に行くと市電も多く走っていた。地下鉄は、環状線と放射線があり覚えてしまう大変便利です。料金は安く(5カペイカ)改札に入るとき支払えば、距離に関係なく何処までも行ける。地下鉄は大変深く掘られており、ホームまではエスカレーターを利用、日本ものより2、3倍の速さで、皆片側に並び急ぐ人に、通り道を開けていたのには合理性を感じた。地下鉄は広軌鉄道なので可成りのスピードで走っている。電車にはつり革がなく、横棒を直接握る。座椅子は日本の座席と余り変わらない。

その他、市内にはタクシーも利用できるが、絶対量が足りないのか、道路の其処ら中で手を挙げて車を止める人がたくさんいる。行政的に白タクが認められている(仕事の合間にバイトをしている、運転手がいるとか?)らしく、普通の車をも止めていた。私たちの車にも、手を挙げている人を多く目撃。モスクワ市内にある鉄道は、行き先が駅名(レニングラード駅・キエフ駅)になっていて間違えにくい。次回は30数年前の東独事情を・・・

つづく



赤山地下壕

小林幸枝

館山へ用事があり出かけ、用事を済ませて時間が余ったので、近くの赤山地下壕、掩体壕（えんたいごう）と館山海軍航空隊、館山海軍砲術学校航跡に立ち寄り、最後に沖ノ島に寄って観光してきました。

日本は原爆が実際に兵器として使われた国でもあり、広島と長崎、それに地上戦が行われた、沖縄を世界中から多くの人々が平和学習のために訪れています。千葉県の館山というと海水浴とかといった穏やかなイメージが強いので、何故館山に戦争遺跡？と思う方もいらっしゃると思います。そのため、あまり戦争と結び付くとは考えられないと思います。

赤山地下壕は、小さな山の斜面に掘られた人工の洞窟で横穴の長さが1・6 kmもあり、全国的にみても大きな戦争遺跡の壕といえます。

昭和10年代のはじめから密かに建設が始まったという証言もあるようですが、今のところ赤山地下壕に関する資料はほとんど確認されておらず、制作された時期ははっきりしていませんでした。現在では終戦がさし迫った1944（昭和19）年により後に建設されたのではないかと考えられています。

アメリカ軍の空襲が激しくなった太平洋戦争の終わりの頃、赤山地下壕が館山海軍航空隊の防空壕として使われていたことは壕内にある発電

所跡や終戦間際にこの壕の中で実際に館山海軍航空隊の事務を行なったという体験や病院の施設があったなどの証言があり、確認出来ます。赤山地下壕は5～10 mと狭いですが、全国でも珍しい、大きな地下壕で、地層の美しさは目を見張りました。

ヘルメットを被り、電中を使用し、見学しました。広すぎて奥まで真っ暗で、進むのは少し怖かったです。また、出入り口も多くありました。

新たな挑戦 4

菊地孝夫

庭に実生の柿の木が一本ある。三本ほどあったのだけど、一本になってしまった。去年、たった一だけ花を付けた。

今年はたくさんの花が咲いた。桃栗三年柿八年というが、今年は八年にあたる。秋には実をつけるだろうか。貰い物の柿の種を、ただ庭に捨てていただけなので、別に手入れしていたわけでもない。いつの間にか成長し、三メートル余りになった。

とても甘い柿だったので、いまから秋を楽しみにしているところです。

先日、ダイソーに行った時にポトスという小さな苗木を買ってきた。ペランダの銀杏の幼い木も、二年目を迎えて10数本ほどが育っている。樹高は10センチから20センチほど。一緒に山百合も成長している。

閑話休題。

新たな挑戦として、物語を書いてみようかと考えているところです。百物語の続編でも思ったりしますが、日本の説話は、私には何だかつまらない。

ひとつには、どうしても説教臭が鼻に付くところがあります。仏教とつながっているものが多かったり、論語道徳的なものだったりする。

どちらも外来の考え方であって、なじめない。人間、それほど清く正しく生きられるものではないか？

話は飛びますが、オリンピックの選手たちが続々来日しています。懸念された通り、早速コロナ患者が出ました。通例ではその時点で入国拒否・本国送還なのが当たり前なのに、そのまま合宿地へ入ってしまった。そこでさらに患者が出てしまいました。濃厚接触者を調べると言っていたが、選手団自体は明らかに濃厚接触者ではないのか？調べるまでもないだろう。送迎バスの運転手も、濃厚接触者にあたるのではないですか？「水際対策」などが掛け声倒れなのはわかりきったこと。

慌てて強化すると言い出したけれど、もう開会式まで一カ月を切っている。検査で、陰性が確認されてから、少なくとも二週間は隔離が必要なのに、これから来日する多くの外国選手たちを、二週間隔離することなど、不可能だろう。

数十万人に上るボランティアの大半が、開会式までに二回のワクチン接種もできていない。

警備にあたる警察官、自衛隊など総てワクチン接種が間に合うのだろうか。

ここに来て、ワクチンの供給量が減ったともいう。

まだ10パーセント台の接種状況では、感染予防には効果がないだろう。

これからこの数百倍の人間が世界中からやってくる。去年だったら、この一件だけでオリンピック中止となつたであろう。今年になってからは、自粛を緩め、開催ありきで動いている。開催関係者は、オリンピック期間中にクラスターの発生がないことを祈っているのだろう。

民心の過半数以上が、大会の中止・延期を求めているにもかかわらず、強引に開催に持つて行くとしている。民意を聴こうともしない。これが、多数決を重んじる国家なのか？

仮に、ここまでで中止となつた場合の、菅政権のダメージは大きいだろう。衆議院選挙という国政選挙も控えている。東京都議選挙もある。政治的理由で開催せざるを得ないというのが本音だろう。

この頃ようやく、空気感染に近い例が報告された。此の可能性を指摘してこなかった病理学者たちの責任は重い。

空気感染の可能性がないならば、換気の必要はなからう。スパコン「富岳」を使ったシミュレーションなどを仰々しく報道していたが、あんなものに科学的根拠などありはしない。「空調理論」を知らないど素人の解析としか言えない。

大会会場は、東京都にとどまらず、全国にある。合宿地も全国にある。そこで果たして十分な感染対策がなされると言えるのか。中央政府は、ただ、実効性のない通達を出すだけである。

〈安全・安心な大会〉。そんなものは始まる前からすでに空疎な言葉となつていく。

オリンピックなどに無関係・無関心の私としては、迷惑千万な話でしかない。

史上最低のオリンピックとして後世に残ることだろう。

経済効果？

将に噴飯もの。スポンサーの高笑いが聴こえるだけだ。



横文字から見たもの

伊東弓子

六月議会、一般質問の三日間が終った。今回の不祥事の件、固唾を呑んで待っていたが、若い二人が触れた程度で物足りなかった。三日目の若い一人は、公務員“市”のコンプライアンスという観点からの質問が進んだ。質疑に対する返答は在り来たりのものであった。市長に於いては「市長公室長、総務課長に同じ」という回答だった。具体的な説明も、確りした今後のことも示されなかった。

・もう他の場で済んだのか。
・口を閉ざしてしまふのか。
と、非常に納得出来ない気持ちだった。

今回耳にした横文字の言葉、コンプライアンスとかタブレットとかが分りにくく、覚えにくく戸惑っているこの頃だが、今回は逃げることなく、

辞書を引いたり、人に聞いて理解するための努力をした。職場で、団体で、地域で生活し、仕事に関わって人々の心構えや企業で守っていく為に何が必要か：と、作った決まり、約束ごと、かと一応理解してみた。それでよいのだろうか。
今迄にも正装したお偉方が深々と頭を下げる姿をよく見てきた。下げた頭の中で、心の中で、何を思つて数秒堪えているのだろうか。

- ・ 一時の恥かきが済めばいい
- ・ 早く終ればいい
- ・ 一応頭を下げてこの場を凌ごう
- ・ これで済ませよう
- ・ これが歯止めになれば
- ・ 上手く切り抜けよう

無事に済むことを待っている、心の中では笑っているのではないかと、私は冷めた目で見てきた。が今回市内で起きた不祥事には驚き、頭を下げている三人を腹立たしく思っている。新聞にも出た。こんな無様な格好になる前に何故姿勢を正せなかったのだろう。注意し合う仲間はいなかったのだろうか。二人だけが話題になったが、他に隠れた人、逃げた人がいたに違いないだろう。役所は縦割り組織とよく聞くが、市民に対しても上から目線でもの申すことが多く、反感を買う気持ちが湧いてくる。

職員の横柄さに驚く。ある支所長さんに花が咲く前に大半の枝を切ってしまったばたん桜の残念さを訴えたが、管理する立場なので・・・と言われ、それで話を押してくるのでいい加減に終わらせるほかなかった。聞く耳を持つてもらふことは難しい。石佛、道しるべ、石碑などは文化財ではないのか。道によって扱いが違うのか。土地の持

ち主に関係するのか。何ヶ所か回ったが埒があかない。特に新しい道、建物の出来る時、行方不明になったり、壊されたりしかねない。誰が、何処が守ってくれるのか、何ヶ所かへ行ったがはつきりしない。三役といわれる一人が代るそうだ。退職された後、経験をもとに指導してくださるような方々の再雇用ならともかく、そういう形はやめた方がいいと思う。結局今回のようなことになりかねないのだから・・・と思う。民間へならともかく、市役所、市の施設へはやめて頂くべきだと思う。人の退職後を兎や角言うべきではないが、ご自分の人生を民間で学んだり、大屋敷、農業に精を出したり、地域のことに出したり、心豊かな体験をしていくのはどうだろうかと思う。お金はもう十分頂けたでしょうから、他の人に回してください。

ある友人と話しながら大笑いした。「大分前は風に出ていた白井先生の言葉を思う出しすね。仕事をしたくない人は地方の役所へ勤めるといいよ。何もやらなくていいよ」の文、今の状況を察していたかのようだった。市のリーダーも春には新鮮な若い人達に道を開いてはいいがでしょう。是非そうしてください。

市民も無関心が多いからこんなことになるとは思いません。隣の市でも、県南でも起きていたのに「どうせ、どこにでもあることだと、反応にもぶいし、無関心なのだ。傍聴してはいかがでしょう。か。今の所平均して一日一人という状況だ。書いたものを見る、話を聞くそれぞれが、方法だが議会、議員、職員を知るには傍聴はよい機会だ。理解していくために市民も努力しなければと思う。「傍聴人がいないと議会が後手に回る。だから一

人でも傍聴にいらしてください」と、言ってくださった人がいる。それからずうーと、私は続けてきた。

議会傍聴をしてきて最近感じることは活気がないことだ。問題提起の鋭さが無い。返事する側の職員も具体的な政策などが、響いてこない。若手、新人は一生懸命だ。中には有利な位置をつなぐため、大親分について行く人もいるようだ。中年の層はまあまあ、という感じだ。年配者は1〜4位だろう。ついこの間までは気骨のある議員が二、三人いた。あういう先輩にはこれから現われないだろう。

どこでどうなったのか、何がどうしたいのかは分らないが、時代の所為にしてほしくない。もつと市民の代表・使命感のようなものを持つてもらわないと、何のためにこの席に座っているのか、バツチに恥ずかしくないのかと思う。そういう方々は後進に道を開いてほしい。

扨て、コンプライアンスという言葉、みなさんはよく知っていた。恥ずかしながら知らないのはわたしぐらいだろうか。でもよい機会となり、この言葉を通して見えてきたものが多かった。

五十代に入って三年位たつ女性の話から・・・夜勤ある職場。相手が精神的に弱い面をもつ人達との生活、仕事をしている。意思疎通は大切なので常に確認し合っているが、共通理解をしていくのは大変な努力がいるようだ。

五十代に入ったばかりの男の人の話から、建設関係の仕事なので危険を伴う作業なので、厳しい心構えが要求されるので、毎朝声を出し合って気持ちの統一をとり、それから仕事に向かって行くそうだ。上の方の人の仕事の駆け引きなどはわか

らないそうだ。

四十代後半の女性の話から

高速道路に勤めていて、三交代夜勤が三日に一遍ある中でお互いにいい時、日の報告を通して理解し合う大事な時間の取り方の難しさ、個人差があるがセクハラ、パワハラにつないでいて問題が大きくなったりして基本的なことを学び合うどころではないという。移動があつてお互いに気がつくことを期待しても難しいようだ。資金の関係で研修もなくなっているのでは何か工夫を考えていかなければと案を出し合っているようだ。

私は職場を遠い昔に離れたので、懐かしさが先に立つて辛かったことも薄らいでいる。個人差が随分いろいろの面に影響するが、何の為の仕事かという所に思いをおいてやってきた積みなので、それが乗り越えようとする力にはなった。少人数であればスムーズに理解し合えても、多人数になると難しい。今現代の価値観の違いからくる人間関係、年令の差等を解決していることだろう。現在は、生活の場である地域で協力し合うことを大切にしていくように思っている。

コロナの時期、人とのつながりを大切にしていること、声かけしてきたが、人のつながりを悪用すれば今回のようなことになるのだろう。と改めて「他人くたばれ、我繁盛」の言葉を思い出した。今度の不祥事に係わって知らぬふりをしている人や体制が沈黙してしまつたのを許せない気持ちだ。

部屋を飾るために摘んできた花、考えてみたら陽の目を見ることなく、薄暗い部屋に彩りをそえている。本来なら道端で風に揺れ、雨に濡れ、陽の光を浴びていたであろうに、人間はすべてを自分の方へ引き寄せているのだ。

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「見」

新型コロナウイルス、ワクチンが流通し始めて少し先が見えてきた様にも思えます。

この成果が顕著に現れて、今の世の中が少しでも良い方向に転換してくれる事を願うばかりです。

今回はそんな、コロナに纏わりじわじわと侵食された私達の生活、変わってしまった日常について、様々な内容の一部を見ていきます。

大きく影響したと言えば、自粛における中小企業の倒産・働ける機会を失い生活が一変してしまつた。これに於いて、明日の生活の目処すら失つてしまつた方々が多く存在するという事。

何気ない日常が当たり前だつたはずの毎日が、とても生き辛くなつてしまいました。

勿論、起きてしまつた事を後から御託を並べても意味がないのは、分かつてはいますが、何も起きなければ過ごせていた日々が、こんなにも難しい事だつたのか、と、痛感させられる数年です。

昨今のニュースでは、自粛疲れから、或いは中々改善されない世の中に対する怒りなのか、夕方から夜間にかけて、外でアルコールを多人数で摂取して、ゴミは散らかし放題、大声で話したり、周囲の迷惑などどこ吹く風。

20代から親世代へと感染し、当の本人達は知らんぷり。

いつの頃からなんでしょうか？

この様に子供達が我が儘・自由奔放に周囲に迷惑をかけはじめたのは。

考えさせられます。

こんな時だからこそ、あらためて考え直さなければならぬのではないのでしょうか。

多くの人は、他者から忠告を受けても中々修正出来ないものです。

自分で変えよう・変わろうと思わない限り、根底にある甘えた気持ち、そこから来る打算的な生き方は変わらない。

多少過激な発想ではありますが、人生やり直しプロジェクトとして、

例外的に。見せしめを含め。法に背く様な改善策を持つて。等々。

こんな事を考えてしまう事もあります。

人道的な問題で、日本においては有り得ませんが、何かの折に触れる度にその様な思考が浮かんでは消えていきます。

側から見れば、ニュースとなるごく一部の報道が、当事者達にはそこから動けなくなる、思考が止まつて全てが手に付かなくなる、そんな事態となるからです。

どんな事柄においても、究極の選択を一度でも経験した場合、十中八九その後の人生は大きく変わるはずで、それがどの様な方向に進むのかはその人次第ですが。

そこまで行かなくても、自立して生活する事は、人の成長を促す1番の方法だと感じます。

義務教育が終われば、そもそも親の子供への支援が無くなつても、文句は言えないと考えています。にも関わらず、当たり前のように支援を受け、その中で更に我が儘に振る舞い、苦勞に感謝もせず、ただ生きる為だけに生きている。そんな事には手を出す必要はあるのでしょうか？

当然、努力し何かを得ようとしている行動には感動を覚える事もあります、そんな時は遠慮されなくても支援を惜しまず、押し付けるかの様に応援したくなるもんです。

そこに至るまでの環境がその子をその様に行動させるのか、元々持つているものがそうさせるのか、そのメカニズムは分かりませんが、

当然、子供に限らず大人にもいえる事です、

自己の利益、幸福を求める事は当然ではあります、が、助け合いの精神、気持ちにゆとりを、

私自身にも鬱憤が溜まっていたのでしょうか、今回はこれでお終いとします。

菖蒲沢の仁王像

兼平智恵子

伽藍守護の神で寺門または須弥壇の両脇に安置した一对の半裸形の金剛力士で口を開けた阿形、口を閉じた吽形につくられている。

菖蒲沢の一对の仁王さまは、当会報一六二号で紹介しました薬師如来像と薬師堂内に安置され、薬師さまと共に市指定文化財になっています。

仁王像

菖蒲沢三三〇〇八

有形（彫刻）

昭和四十七・十一・七指定

今回は平成十九年作成の「八郷地区歴史めぐり」をご覧ください。



フルツライン「辻」交差点左に入るとまもなく薬師堂への駐車場が左側に用意されています。およそ標高二〇〇mと言われている山中にありますので案内矢印にそって、民家の細い道を上って行きます。

やがて古い校舎を思わせる建物の入口に「法相宗徳一法師御小屋跡」立て札が迎えてくれます。整備されたコンクリートの道を登り始めます。

馬の守護神「馬櫛神」、二十三日の夜に人々が集まり飲食しながら祈願を行う「二十三夜供養塔」、氏神様、心の動揺や浮世の波風を切り払って頂くようにと祈る不動尊、それぞれの神様に手を合わせ、やがて竹林が目前に左カーブここからが真っ直ぐな上り坂の参道になるのだろうか。

間もなく左側に天白明神大稲荷、そして更に頂上にある龍神様行き入口を通りすぎると左に傾いた燈籠（現在は真っ直ぐになっています）。到着です。

対の仁王さまも薬師さまと同じ二度の大災から難を救われましたが由来も製作者も不詳。憤怒の様相から鎌倉期またはそれ以後の作と推察されている。

身丈二m十cm、顔面と手足の一部に破損をみるが仁王像としての形態を保ち、今も薬師さま守護の任を果たしています。

故白井代表も好んで菖蒲沢古道に足を運んでいたようです。

「ふる里の七十二侯に一行の呟いて七十二相」

詩文 白井啓治
相絵 兼平ちえこ

ふるさと風の会文庫より

○ 木漏れ日の落とす池に尼僧の姿想う



○ 木漏れ陽のとどこかぬ山道一人登る



○ 石段のかたむいて本堂のかたむいて

木像の一人静かに



○ひっそりと薬師如来の座り居る山桜



○山桜咲く枝の見上げて薬師如来の何を思う



菖蒲沢の薬師さまにつきましては当会報七号にも掲載。その折に登り口付近にいた古老の方曰くこの辺りに尼寺もあったらしいと。

相絵は五百余りの面相から「無作為に選んだが結構詩文に合っていたよ」と師を思い出す事でした。最後に平成十九年、展示会出品作です。



二〇〇七年九月より修理作業が行われ、薬師如来像も運び出され修復が行われました。二〇〇九年三月に完了し、七月に開眼供養式が行われました。この修復によって如来像の製作時期が江戸中期である事が判明しました。

● 人災を受けた子らが

天災を受けた皆が叫ぶ

心に守り神宿せよと

智恵子

※ ふるさと「風」の会

朗読舞踊団「ことば座」で見るとカラーになってます

【風の談話室】

《読者投稿》

やまぐさうし(53)

まじ女

庭のホタルブクロがかわいい。我が家のホタルブクロは特別、袋が二重(八重の・・・?)になっている。紫にピンクに白、風に揺られてダンスしているみたい。

・今年は枇杷が豊作らしい。一軒先の主がいなくなった荒地に大きな枇杷の木がある。食べごろに色づいた実がたくさん実っている。散歩の途中、道路際の手が届く所の実を毎日1個頂いている。甘くてとてもおいしい。いつもは食べごろになるとカラスが、押し寄せるようにやってくるのだが、今年はまだやってこない。ほかに美味しい物があるのだろうか？

・久しぶりにお日様が出て清々しい、今日は何をするか……。すると、イチゴ屋さんから「いくちゃん、今日手伝って貰えない……。」「と電話がかかってきた。我が家の用事は何時でもいいので、二人で手伝いに行くことに……。既にいつもの仲間が来ていた、早速10人での作業。冬の寒さ対策で二重にしていたビニールハウスのビニールを一枚はがす作業、なかなかの重労働。7棟もあるので大汗を掻いた。終わった後の奥さんのお料理、いつもながら美味しく頂いて帰ってきた。高齢化農家さんに頑張ってもらわないと、それにこの御夫婦さんを皆さん好きなのです。

・狸のやきものを骨董屋さんに頼んでから1年近く経つ、今朝突然に電話があった。頼まれていた二体一緒の信楽焼の狸、手に入ったよ……。今朝早々に栗の家の骨董市に出かけた。これで4体の狸さんが庭に鎮座した。

・関東地方も梅雨入り……。一雨のち、畑の草の勢いがすごい事になっていた。午前中大汗かいて、草と格闘していると、友人から岡野ファームへ行ってきたよ。すごく素敵だよとの情報が、そういえば最近のF B上でも度々ファームの情報が流れている。これは早い所行ってみなければ、とりあえず今日はジェラートだけでも3時近くに出かけて行つた。古民家をリフォームした素敵なCafe、庭にはオープンテラスが、ブルーベリーのジェラートを味わいながらCafeのご主人と観光果樹などの話をしていると、小田島御夫婦がやってきて、縁側でしばし、まったりとした時間をすごしました。来週からブルーベリー摘みをできる

そうです。

・オカリナの音色が、〃こんこんギヤラリー〃をあたたく包んでくれた。この日は、野口さん夫妻によるオカリナコンサート。久しぶりに、生演奏を聴いて本当に嬉しかった。野口さん、〃こんこんギヤラリー〃の皆さん有難う……。〃

・梅の収穫時期、直売所にも沢山の青梅が出ていた。我が部落にも、10数年前には梅農家さんが数件あったが、今は柿農家に変っている。その時の名残か、所々に大きな梅の木があり、散歩していると道路迄梅の実がゴロゴロ落ちていた。勿体ない事この上ないが、あまり梅には関心ないらしく、収穫の様子もない。そのうちの一件、同級生の畑に大きな木があり、実が沢山実っていました。貰っていい？と聞くと。いくらでもと言われ、さっそく梅落としに行く。今年は梅干し、梅シロップ、カリカリ梅、梅ジャム、と頑張ろうと思う。

・この季節、草の勢いが凄い。草刈りをしようと思ひ、2台ある草刈り機の内、1台のエンジンがかからない。もう何年も使っているし新しい物を買いかと。パワーコメリに出かけた。今回は係りの方がとても親切だった。値段の高い方を選ぶと、こちらの方が使い勝手がいいしお得ですよ……。と、そして試運転してみましよう、ていねいに説明してくれた。故障の機械は修理に出した。新しい草刈り機はとても軽やか、今日で3日連続草刈をした。草で覆われた道路もさっぱりと家周りも大分きれいになった。夕方に、修理に出した機械、治りましたと電話があった。修理代千円です

と……。まあ、3台あっても秋までフル回転だし、いいとするか！

おすすめの本 4

燕石（えんせき）

嘘か本当かわからないが、自衛隊の公安部門が、全国の図書館に対して、来館者の読書履歴の閲覧をしているという。もしこれが本当であるならば、本人の同意もなく、知らぬ間に個人の読書傾向が秘密裏に調査されているということだ。

目的はもちろん、個人の思想傾向の調査であることははっきりしている。

個人情報保護などという建前は、全く無視した暴挙と言える。各図書館の館長はこの要請を拒否していない。

思想信条の自由、という基本的な人権が全く通用しない国であるということだ。こうしたことをやっておきながら、「自由の国だ」などといけしやあしやあとと言っている。

筆者が読んだ本を、赤の他人なぞに調べられたくはない。

この情報のもとでは、インターネット上で知ったことで真偽のほどは判らない。

インターネット上での発言や画像には、配信会社からただちに規制がかかる。理由は有害だからということだが、個人に対するいわれなき中傷などは放置同然である。

管轄する官庁は、まともに機能していないと言

える。誹謗中傷によって多くの被害者が出ているというのに。自殺者や精神を病んでしまう人が多数出ている現状を分かっているのだろうか。

たとえ何とか刑事告発に至っても、量刑は極めて軽いものでしかない。

ネット上の誹謗中傷が明らかに犯罪行為だという認識が欠落している。それでいてIT庁などというまたぞろ役所を増やし、お茶を濁そうとしている。

常習のネット犯罪者は、いくら排除されても、アカウントという登録名を替えて、再び中傷を始める。これらの人間にだけは、発言の自由が保障？されている。

呆れたものだ。

原色日本薬用植物図鑑 保育社

木村康一 木村竹厚共著

1981・07・01改版

漢方薬について調べたくて、この本を手にとった。山野に自生する植物の多くが漢方薬の原料となっている。中国原産のものも見られるが、日本の亜種も同様の薬効があるらしい。

オオバコや、ハコベ、ドクダミなど、数え上げたらきりが無い。

また鶏頭や辛夷（こぶし）などの鑑賞用の植物にも薬効があるという。

サルノコシカケという、キノコ類には抗がん作用があると言われている。

筆者は化学合成された、薬品は信用していない。化学式の類似したものを、人工的に合成して作ら

れたものが大半である。

例を上げれば、「LSD」という覚せい剤がある。麦に寄生するカビ菌の幻覚作用を、類似した組成で作られたものである。

勿論、古来からある薬草などの成分を抽出して、薬ともしている。

漢方薬といえども、ものによっては副作用がある。例えば、ある種の薬草は妊婦には使ってはならないと書かれている。

一般には、漢方薬は穏やかな作用であるとされているが、なかには劇薬もある。使用を誤れば病状を悪化させるし、場合によっては死に至る。

有名などころではトリカブトが知られている。附子（ぶし）という。乾燥したものを心臓薬として使う。用量を間違えれば死に至る。

意外なところでは、ツチハンミョウという地味な甲虫も、毒がある。

ハンミョウ（斑猫）という金属光沢を持った奇麗な虫とは少し種類が違うようです。

中世の日本では、しばしば政敵の毒殺に使われている。西洋では「ドクニンジン」がしばしば使われました。

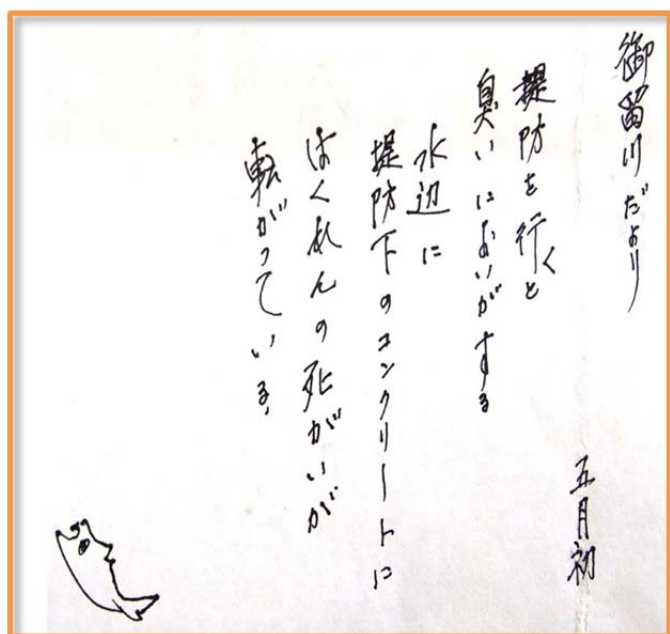
綺麗なアジサイも、花や葉に毒があります。スズランも毒草に分類されます。

キノコもよく知られています。

付言しておきますが、筆者はたとえ嫌いな相手にも、これらの毒薬は使いません。（笑）

ただ、毒のある言葉を使うだけのことです。

【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



茨城県の難読地名とその由来（16）

木村進

舟生【ふにゅう】【ふにう】

常陸大宮市（旧山方町）、筑西市（旧関城町）

「舟入」、「船入」ともに【ふにゅう】と読みます

が、これを全国の地名で調べてみました。

・福島県伊達市梁川町舟生（ふにゅう）

・福島県伊達市梁川町山舟生（やまふにゅう）

・茨城県常陸大宮市舟生（ふにゅう）

・茨城県筑西市舟生（ふにゅう）

・栃木県塩谷郡塩谷町船生（ふにゅう）

また、「舟入」、「船入」という地名も出てきますが、こちらはすべて「フナイリ」「フネイリ」などと読み、「フニニュー」という読みはありません。どういうことなのでしょう？

福島県と茨城県は「舟生」、栃木県が「船生」です。かなり地域性がある地名と言えそうです。

栃木県塩谷町の「船生（ふにゅう）」は作曲家の「船村徹」の出身地です。船村徹はペンネームです。で、地名の「船」を入れた芸名にしたのだと思います。「舟生（ふにゅう）」の由来については茨城県のところには書かれたものがありませんでしたので、福島県の「舟生」「山舟生」について調べると、鎌倉時代ころに、この地域に「船生郷」という郷名があったとされています。こちらの舟生は「船生」と昔は書いていたのです。また「ふにゅう」「ふにう」という読み方ではなく「ふねお」と呼ばれていた時代もあるようです。こちらの地名由来は山舟生にある「舟形の石」が地名の由来ではないかともされていましたが、これも「羽生」と同じく、「丹生（にう）」＝丹（に）を産するところ

が語源ではないかとも言われています。栃木県塩谷町の「船生」の地名由来については、角川日本地名大辞典には、「鶏岳の東麓、船木沢の溪間に周囲3 m余の大木の槿があり、これを伐採して

彫船を作り鬼怒川に浮かべて村民が旅人の通行に便を与えたことによると伝えられる」と書かれています。

またこの塩谷町の「船生」の地には「岩戸別神社（いわとわけじんじや）」という古社があり、「船生郷」の総鎮守とされましたが、地名の由来などとの関係はよくわかりません。

祭神は天岩戸をこじ開けた「天手力雄命」です。岩や石を信仰して祀っているところは全国にあり、この石・岩が舟形をしているものはところどころにあります。

茨城県城里町にある「石船神社」もまさにご神体が大岩ですが、天鳥船神を祀っているために、境内にある舟形の石も信仰されています。

地名の由来はこれらの舟形の石や木でつくった船などの可能性もありますが、あまり全国的にはみられないため、「舟生」「船生」とともに、「丹生（にう）（にゅう）」が変化したものかもしれません。

「丹生（にゅう）」の他に「壬生（みぶ）」も同じ語源だと思われます。

「丹（に）」とは赤色の顔料に使える土のことです。赤い色（くれない）のことを丹紅（たんこう）という呼び方などに出てきます。

仏生寺 【ぶっしょうじ】 石岡市(旧八郷町)

石岡市八郷地区の辻イチゴ団地の信号を入った筑波山の麓に「仏生寺」という地名がある。

しかし、この近くに同じ名前の寺はない。あるのは小野小町伝説で知られる「北向観音堂」だけです。「八郷の地名」（八郷町教育委員会編）によれば、地名の由来は、「小野越村北向観音伝説によると、中世僧行基が、老翁の指示に従って仏像をつくり堂宇を建立して仏生れる処と名付け、今は廃寺の龍光院がその寺という。古老は、小野越・佛生寺はもと一村という」と書かれています。また、地元のボランティア団体の「八郷ふるさとの史跡守り隊」が発行している「民話の里めぐり」というパンフレットに地名のいわれが載せてあり、これによると、概略、

「行基菩薩が稽主勲を伴って、筑波山を経てこの地にさしかかると山里に光明を見た。

急いで行ってみると神龍が潜むような川の淵に白髪の老翁がいて、近付くと雷が落ち周囲の木が燃え、白壇の木が残されていた。そして、この木で仏像を彫り住民に与えたという。そして、後に堂宇を建て「龍光院」と名付けた。行基菩薩は、「この地は仏が生まれた地であるので、仏生寺と名付けよ」と言われたという。」となっており、「八郷の地名」とほぼ同じです。

一方「八郷町誌」には、この北向観音堂に安置されている観音様について、次のように紹介しています。

「一説には、観音を背負った回國六部がここにきて病にかかったとき、長い間厄介になったある家の主人に観音のご利益を説き、お礼として残した

ものともいう。」となっています。

回国六部は法華経を写経して全国（66か国）に配って歩いた僧侶や篤志家の人たちで六十六部と呼ばれました。

確かにこの一帯から弓弦（ゆづり）のあたりはいろいろ信仰も厚かったようで、人数の少ない部落が多い中でいろいろな仏教遺跡も多い場所です。ただ、この伝承も地名が先にあって、話は後からつけられたのではないかと感じます。

では全国で「仏生」「仏生寺」という地名を探してみました。

・茨城県石岡市仏生寺（ぶっしょうじ） ・新潟県小千谷市三仏生（さんぶしょう）

・富山県氷見市仏生寺（ぶっしょうじ） ・富山県中新川郡舟橋村仏生寺（ぶっしょうじ）

・岐阜県本巣市仏生寺（ぶっしょうじ） ・滋賀県彦根市仏生寺町（ぶっしょうじちよう）

・香川県高松市仏生山町甲、乙（ぶっしょうじちようこう、おつ）

柳田國男が書いた「地名の研究」にこの仏生についての記述があります。

12 神仏の名…「……仏寺仏堂に対する指定地も色々あった。検地と称して特に租税の全額を免除したものの他に、半分または三分の一を減免して、その分だけを仏に奉るのを免といった。

薬師堂の領する田を薬師免、油の入費に宛てたものを灯明免、または油田などをいっている。仏を

敬う風は昔から盛んであったと見えて、仏供田という地名も此地方にはきわめて多い。或いは仏聖（ぶっしょう）とか仏生とか書いた字名もあるが、これなども正しくは仏餉田というべきで、即ち仏様に、日を定めて御飯を供える米の出処であったのである。 こういう経済上の理由以外にも、神仏の名を呼ぶ地名はこれに限らず、どこへ往つても非常に多いものである。」

などと書いていて、ここには十三塚の地名などかなり集めていたことがうかがわれます。

これによれば、仏に供する米を作っていたところが免税となり、仏生などの地名がつけられたようです。仏供田という地名には下記がありました。

・愛知県稲沢市平佛供田町（ぶくでんちよう）

吉生【よしう】 石岡市（旧八郷町）

この石岡市八郷地区の吉生（よしう）地区の山の中腹には関東の清水寺とも言われる峰寺山西光院がある。この地名の由来にはこの寺にまつわる伝説が言われています。

「八郷の地名」（教育委員会編）や「八郷町誌」には、地名由来について、次のような伝説を述べています。「小栗判官が妻の照手姫をつれて通りかかった時急に産気づいたので、判官は山上の観音に祈願したところ、たちまちにして立派な男子が生まれた。このよく生まれたに因んでこの里の名を吉生と名付けたことに始まる」と言われる。た

だ、一般論としては葦の繁る湿地の処を美称の吉生に置き換えたのであろう。とも書かれています。どこも地名は縁起の良いものに変えるというところが良く行われてきました。

ここも葦生が「吉生」にいつの頃か変わり、それにつれて、名前に合わせた伝説が作られてきたのだと思われます。

伝説は、山を越えた先にある旧協和町の小栗判官の説話が有名になり、このあたりにも影響しているでしょう。

ただ伝説もパターンは2つあり、山の観音様にお詣りして無事子供が生まれたという話と、地元にあるきれいな湧水を飲んで産気づいたのが良くなつて無事生まれたというものがあります。

峰寺山にある立木観音は根の付いた自然木に彫られた大きな（十一面）観音像で県の重要文化財に指定されています。

大昔を見てみると、この吉生は「大幡郷」に属していました。この郷の中心となった地区が現在の「小幡（おばた）」地区です。ですから大幡（おおはた）↓小畑（おばた）に変化したものです。

ここは機織りが盛んであったようです。また隣の「葦穂」は「夷針郷」でした。この「葦穂（あしほ）」の名前は今の「足尾山」の古名である「葦穂山」が元になっています。

加生野【かようの】 石岡市（旧八郷町）

最初は萱生野村といったが、天保年間に加生野村と改称した。

地名大辞典によると「カヨノ」は通生・加用・賀陽・萱生などから萱・茅などの茂る処の地名という。

この地域は開拓が遅く、月岡の人々が通いながら開拓して、月野岡の野を取り野に加ふる道より加生野となったとする説が強い。（八郷の地名）

平地であるのに開発が遅れたのはこの地に多くの古墳が残されており、神聖にして侵すことのできない信仰対象地域であったのではないかと考えられています。（八郷の地名）

近くにある変わった地名を少しここで紹介しておきましょう。

★風来里【ぶらり】：

小屋地域に位置する上曽飛び地。「ブラリ」は土地の出張った処や垂れ下がった処などの意。漢字の表記の「風来里」は山頂から風が吹き降ろす里集落の意である。（八郷の地名）



常陸旧地考（13）

菊地孝夫

下巻（六）

○村上神

三代実録に仁和元年（885）九月七日戊子、常陸國從五位下村上神從五位上を授と見えたり。この神社は新治郡村上村の龍神宮これなり。村上村は、今は小村なれども古は大村なりしよし里人言い伝う。村上千軒など女童の口ずさみにもいいあえり。

さてこの近き当たりに上林下林村あり、下林村の亥村上山観音有。今のよにも御朱印というもの十五石ありて大寺なり。この山号よし有りげなり、なおよく尋ぬべし。

風土記那珂郡の条に、茨城の里より以北高丘あり、名を輔時臥之山という。古老曰く、兄妹二人有兄名を奴賀毗古、妹名を奴賀毗メ妹部屋にある

時人有り、姓名知れず。常に求婚夜来て昼去る。ついに夫婦となる。一夕にして懷妊、産み月に到り遂に小蛇を産む。明ければ語ることなく、闇に母と語る。ここに置いて母も伯父も驚き、奇心神の子を挟みて、即浄盃盛、檀を設け安置。一夜之間に既に中に満杯となる。瓶を替えて、置く、これまた満杯。かれこれ三四度、あえて器を用いず。母、子に告げて言うに、汝器宇量り、おのずから神の子と知り、わが属の勢い長く養うべからず。宜しく父所在に従い、あり合わず。この者時に、子哀泣、面を拭い、答えて言う。謹んで母の命を賜る。敢て辞する所なし。而して一身独去、人共に去るなく、望請令、一小子を副えよと。母云う、我が家在于る所母と伯父、而してすでにこれまた汝あきらかに知るところ、當人の相従うべく。ここに子恨みを含み、その事吐きあえず。決別の時に臨み、怒怨勝てず、伯父震殺と欲す。天に昇るとき、母驚き、甕を取り投げる。子触り、昇ることを得ず彼この峯に留まる。伯父

今の片岡之村ありその子孫社を立て、祭りいたす、相続き絶えず云々と有り

この古事は茨城郡茨城郷のことなるを、那珂郡の茨城郷の条に紛い伝わりたるものなり、即ちこの神子をまつるとある、今の村上村の龍神なること、疑いなし。村上村より今の道一里半ばかりに片岡村在り。

今按ずるに、新治郡村上村、染谷村の龍神に両方ともに村上神なり。そは村上村の村上神なり。

さてこの村上のうち染谷の方にもとき祭りたるものなり。この類いも多くあることなり。いにしえは染谷村は村上村のうちの小名なるを今は返さまに、村上は染谷の内の、小名のごとくなれり。

されども、いにしえ大地なることは染谷村の人（今年文政十年、年五、六十の人）の話にわが染谷村は、いにしえは村上村の内にて染屋職のもの多く住居たるゆえ、染谷村といしを、いつの頃から、今のごとく染谷村とは書き換へたるなりといえりき。

染谷村の村上村の小名なることは染谷村にも伝えたること疑いなし。さてその地の大名の、片隅に残りて地名の変れる類いと多し。すでに隣村の府中村はいにしえの茨城郡茨城郷なるを、茨城という名は僅かに片隅に、いまのバラキに残りて府中村となり、また行方郡の富田村にカスミの地名残りたる類い有。なおあるべし

○菅田神社

三代実録に仁和三年（887）三月一六日己丑常陸國正六位菅田神從五位下を授と見えたり。この神社今在る地を知らず。

國誌に源順氏書河内郡菅田郷ありと見えたり。この郷、今の河内郡の内に無し。

ある人の説に、新治郡上堺村の鎮守神を姿見明神といえり。古き額に歌三首あり。その歌にすがたの神と有り、この地古くは河内郡なるべき地勢なり。ゆえにこの姿見明神即ち菅田神にて上堺村いにしえの菅田郷なるべしといえり。

神名帳に近江国蒲生郡播磨国加茂郡山丁国漆下郡に並に菅田神社あり

○飛護念神 ひごね

三代実録に貞観一六年（876）五月一日戊戌、常陸國飛護念神從五位下を授と見えたり。今在る地を知らず。

○國都神 くにつかみ

三代実録に貞観一六年（876）五月一日戊戌、常陸國國都神從五位下を授と見えたり。今在る地を知らず。

○郷造神 さとつくりのかみ

三代実録に仁和二年（876）六月二八日丙子常陸國正六位上郷造神從五位下を授とあり、一本に御造神に作れり。いづれ正しからん。この神も今ある所を知らず。

○香取神子社

風土記行方郡の条に、郡南七里男高の里在り云々。栗家池有。その栗大きければ、池の名と為す。北に香取神子社在りと見えたり。この神社由もなし。今在る所を知らず。栗家池も知らねば、尋ね牟

○香嶋香取二神子社

風土記行方郡の条に、郡より東北一五里に当麻郷在り云々。香嶋香取二神子之社あり。その周りの山野、櫟柞栗柴、往々林をなす云々と見えたり。今在る所を知らず。

○香嶋神子社

風土記行方郡の条に、波都武之野在り。倭武天皇この野にとどまり、弓を修理により名づくなり。野の北、香嶋神子社在り云々と見えたり。さてこの野も知らねば、御社も知られず。

○坂戸社

風土記鹿島郡の条に、惣領高向大夫請け云々、神郡を分け置き、その在る所の天之大神社、坂戸社、沼尾社三所合わせて鹿島之大神と惣称すと見えたり。今同郡山上村にある坂戸明神これ也。

○沼尾社

同上、いま同郡沼尾村在り。また沼尾池有。今褪せて谷地となれり。

○飯名社

風土記信太郡の条に、その里に飯名社。これ即ち筑波岳所有飯名神之別属なり云々あり。いま不詳。

○安良佐賀之神

風土記鹿島郡の条に、淡海大津朝のとき勅遣使人造神之宮。それ以来修理絶えず。別の都市七月舟を造り、津の宮に奉納云々、また別の年四月十日、祭りを設け、酒を灌ぎト氏種属男女集い日を積み夜を累ね、飲樂歌舞その唱に曰く「安良佐賀之賀味能彌佐氣乎多義止伊比祁婆賀母与和賀恵比爾祁牟云々」と見えたり。今ある所を知らず。

○賀比礼之高峰

風土記久慈郡の条に、薩都里云々、東に大山賀比礼之高峰という。即ち天神在り立速日男命名づく云々。今ある所を知らず。

○名所部

古書歌書に見えたる名所の、世の移り来ぬるまに、早く廃れて人も知らず成り行き、或いは元の名の vari、あらぬ名になり、また元の名は僅か

片隅に残り、またはその文字につきて文字音に唱え誤りもし、または音の同じき文字などに書き換えもし、などもあり、今の世までも正しく伝え来ぬるは、少なくななりたる。さるは古にしかば、より名高き地のしかうつまれゆかむは、新しき事ならずや。ゆえに、その所々のかくもやあらんなど思いよれる事のあるを、聊かしらん聊か知らずになん。なお漏れたるかあらんは、後の人、考えい出たらんまにまに書き加えてよ。

○鹿嶋

鹿島郡嘉島郷なり。その条に言えるがごとし。
名寄鈔、鹿島篇 宮 神 崎 浦 潟 云々
崎 万葉集七卷
あられふり鹿島の崎の波高し

過ぎてやゆかむ戀しきものを

また 九卷

牡牛乃三宅之潟に指向う

鹿嶋の崎に狭丹塗之小船儲けて云々

浦 潮ひるまはかしまの浦という

波のよるこそ見るべかりけれ

潟

宮よするかしまの潟のしおさいは

たのむおもいのみずにぞありける

歌枕、秋寢覚に鹿島宮俊頼鈔に、常陸の鹿嶋明神祭りの日、女の懸想人の数多く在る。名どもを布の帯に書き付けて、神前に置くなり。すべき男の名書きたるは、おのずから裏返るなり。女のさもと思う男なれば、やがて親しうなるとうんぬん。その事を、常陸帯という。

心にて読める歌

東路の道の果てなる常陸帯の

かごとばかりもあらんとぞ想う

等見えたり。このほか多し



【豆知識】

若松町の仇討事件

木村 進

江戸時代には赤穂浪士の仇討事件などがありました。賀、ここ石岡市の若松町でも仇討ち事件がありました。星の宮神社祭礼の引き継ぎに毎年の出来事を書いて残したものがあり、これが石岡市史にも記載されていましたので紹介しておきましょう。

この大事件は、幕末の安政三年（1856年）1月に府中平村若松町で起こりました。

ことのいきさつは越後（新潟県）新発田藩（10万

石）で起きた事件がきっかけでした。

仇討事件の前年10月に新発田藩の飯島量平の母（49歳）が傍輩の飯島惣吉により殺害され、姉も深手の傷を負ってしまったのです。

そして惣吉は行方をくらまし逃げてしまったのです。

そこでまだ16歳であった飯島量平は母の仇討を藩に申し出て許可されます。

また当時江戸詰め藩士であった伯父榎本周吾も助太刀を申し出ます。

こうして、敵を探す旅に出るのです。

新発田から会津方面へ敵の消息を求めていきます。そのうち、敵は米沢から仙台に行き、そこからまたいなくなったとの情報を聞き、三春、相馬、岩城、上田宿などを探しまわったといっています。

更に小名浜、中村、仙台、白石、福島、二本松、須賀川、棚倉、水戸と探してようやく手がかりを得たのです。

敵の惣吉が府中（石岡）宿香丸町で髪結床菊蔵のところに髪床職人になって身を隠していたことが判明したのです。

相手を確認して、見張っていると、追手に気がついた惣吉が夜中に逃げ出したため、町はずれで切り殺したのです。

この殺人は新発田藩の仇討許可証を持参していたため、仇討として認められ、丁寧に扱われたといっています。

相手の確認には新発田藩江戸の上屋敷から三人の使者が来たといっています。

また、その後、仇討をとげた飯島量平は新発田へ

戻り、出世を果たしました。そして、新発田藩から府中へは関係者に謝礼の金や礼状が届きました。仇討事件はテレビでは時々でてきますが、実際にはあまり多くはなかったのでしょうか。このように遠いところから探しまわって本懐を遂げたのですから、話としては目の目を見ても面白いだろうと思います。

赤穂浪士と真壁藩

木村 進

有名な赤穂浪士の討ち入りは元禄15年12月14日であるが、この有名な赤穂浪士と常陸国との意外な関係は余り知られていないようなので、を少し紹介してみたいと思う。

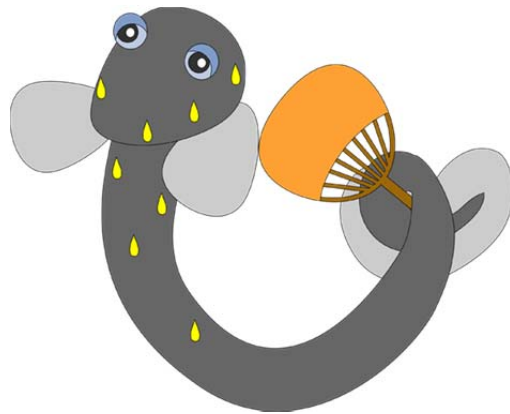
赤穂浪士は大石内蔵助をはじめ四十七士が主君の仇討をするのであり、皆播州赤穂の出身と思われるようですが、実は半数近くが常陸国真壁、笠間、麻生、東海村などの出身者なのです。

これは、主君浅野家が最初に立藩したのが「真壁藩」でした。そして加増して笠間藩へ移ります。もう少し詳しく書くと、豊臣秀吉の妻「ねね」の妹が嫁いだ浅野長政は関ヶ原の合戦で家康側につき、和歌山で37万6千石を有したが、家督を子供たちに譲り、この浅野家本家は広島藩主となります。長政は隠居して真壁藩5万石の藩主となります。

その後、真岡藩2万石の三男（長重）が真壁藩を継ぎ、大坂の役での戦功が認められて真壁藩から笠間藩5万3千5百石に転出しました。

しかし、その子（長直）の時、佐白山頂にあった城への往復が大変であり、麓に藩庁を建てたのが、

新城を築いたとして武家諸法度にふれ、正保2年（1645年）赤穂藩5万3千石に転封となったのです。討ち入りが行われたのはこの57年後であり、討ち入りに加わった年配の方はこの笠間・真壁の出身者が多かったといわれています。堀部安兵衛の父、堀部弥兵衛は笠間の生まれで、義士の最年長の77歳でした。



【特別企画】

打田昇三の太平記（11）巻第五 2

○大塔宮、熊野落ちの事

後村上天皇の弟である大塔宮二品親王（品は、ほんと読み一く四ある親王の位階・名は護良Ⅱもりなが）は笠置城の安否を知りたくて暫く奈良の

般若寺に隠れていた。その間に、笠置城が落ちて後醍醐天皇も捕虜になった…と聞いたので、倒幕運動に加わった自分も危ないと知ったが、気が付けば般若寺以外には自分の潜伏する場所も無い。

其の間に、一乗院と言う寺に巢食ついていた按察法眼（あぜちほうげん）好專と言う坊主が護良親王のことを知り、幕府方に情報を提供したから五百余騎の軍勢が朝早くから般若寺を取り囲んだ。

折悪しく普段は傍に付いている者が一人も居なかったから防御も出来ない。大塔宮は、もはや是まで！と自害を覚悟で着衣を脱ぎ掛けたのだが未だ敵が近くに出来ない。思い直して何処かに隠れようと、仏殿のほうを見ると坊さんが経を読み掛けた経櫃が三個有った。二つは未だ蓋を開けずにあ

り、一つは経文が出し掛けて半開きになっていた。ので、開けられた経櫃に隠れて経文を被り蓋を開めずに置いた。発見されれば自害する覚悟で短刀を腹に当てていたのは悲壮な決意である。

間もなく仏殿にも軍勢が入り込んで来て蓋が閉められた経櫃は中まで調べたが、蓋が開いて居たほうは「見るまでも無し！」と合理的な判断をして引き揚げたので大塔宮は助かった。しかし自分を発見する迄は再捜査もあると思い、今度は蓋が閉まった経櫃に移動して隠れた。

程なく軍兵たちが戻って来て「蓋が開いていたほうを見なかったのは迂闊であつた！」と経文を全部取り出して調べたが、居る筈は無い。兵たちは「般若経の経櫃を探したが大塔宮は居無くて、代わりに大塔の玄奘三蔵（が持ち帰った経文）がお居でになった…」と笑いながら引き揚げた。

大塔宮は「…危ういところを助かったのは偏に摩利支天（日月の光や陽炎を神格化した印度の神

仏・武士に信仰された」と十六善神（般若経に由来する十二神将と四天王）の御加護……と感涙に袖を濡らし、般若寺を脱出して熊野へ逃れた。

原本では唐突に、光林房玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河房・武蔵房・村上彦四郎・片岡八郎・矢田彦七・平賀三郎の九人が従い、山伏姿で熊野参詣の様にして行つたと書いてあるが、般若寺事件の際に此の連中は何をしていたのか？

人目を忍ぶ逃避行の道中は厳しいから、大塔宮は大丈夫であろうか？と供の者は案じたのだが、いつ覚えたのか粗末な足袋・脚絆・草鞋を履いて草臥れた様子も無く途中の神社仏閣に詣で、宿場での勤行を自然に勤めたので行き会った修行者などに怪しまれることもなく進む事が出来た。

原本では道中を「……由良の湊を見渡せば、沖行く舟の楫をたえ、浦の濱ゆふ幾重にも……」などと抒情的に表現しているが、奈良から熊野へ行くのは山岳地帯であり、まして逃避行の最中に景色の良い場所を通る筈が無い。何れにしても一行は和歌山山地を越え、現在の和歌山県印旛地方にある切目王子（熊野神社の第一末社）に辿り着いた。其の夜は神社の境内でお祈りを続け、明け方に大塔宮が朦朧としたところで、夢の中に一人の童子が現れて気の毒そうに言った。

「……熊野三山は人心が纏まらず天皇方に味方することが出来ない（此処に匿うことが出来ない）ので、どうか十津川方面に逃れて時節の到来を待つて下さい。当社権現からガイドを付けてご案内を致させます……都合の良い夢では有るが信用する他は無い。原本にはガイドが来た記事は無いが大塔宮の一行は、更に山道を十数日も歩いて疲労困憊の果てに十津川へ着いたのである。十津川へ

行くには一行が辿つて来た道を逆行することになるのであるから熊野の神様も人使いが荒い……」

取り敢えず宮様を十津川集落の辻堂に収容してから家々に行き「……熊野参詣の山伏どもが道に迷つて来ました……」と宣伝したので、信仰心の厚い村人たちは気の毒に思い、栗飯や橡粥などを持ち寄つてくれた。それで飢えを凌いでから光林房玄尊が集落内の裕福そうな家に行き、使用人らしい少年を呼んで当主の名を訊ねたところ「……竹原八郎入道殿の甥で戸野兵衛と申すお方のお屋敷」と答えた。近隣には名の知れた人物なので此の者を頼ろうと思い、門内に潜んで様子を窺っていた。

すると家には病人がいるらしく「……修行を積んだ山伏が集落に來られた様なので、御祈禱をお願いしてみては如何であろうか？」言う声がした。

玄尊は「是こそ願つても無いチャンス！」と急に声を張り上げて「……拙者らは三重の瀧に七日うたれ、那智に千日籠り、三十三か所の巡礼に罷り出た山伏共に候が図らずも山路を踏み誤り、此の里に出で候。御慈悲をもつて一夜の宿を貸し一日の飢えを凌がせ給え……」と申し入れた。是を聞いた此の屋の奉公人が出てきて「……実は当家の女房殿に悪霊が取り付き苦しんでおられる……御祈禱をお願い出来ますか？」と問う。

玄尊は勿体ぶつた言葉で「あの辻堂に休息されて居られるお方こそ、我らが先達の靈験第一の御坊である。此の事を申し上げてお願いしてみよう」と言えば、奉公人は喜んで其の旨を主に伝えた。玄尊は一行に其の事を知らせたので逃亡中の主従は戸野兵衛の屋形に入ることが出来たのである。

偽行者の大塔宮は病人の枕元へ行き、大声を出してデタラメな加持祈禱を始めたから病人に巢食

つていた病魔も呆れて体外に飛び出す他は無い。奇跡的と言うか奇怪というか、病人が恢復の兆しを見せたので家の主は喜んで「……お礼をしたいが、病人の長患いで差し上げる物も有りません。その代り、此の地に十日ほど逗留して旅の疲れを癒して頂ければお世話を致します」と申し出た。

玄尊は「有難い！」と思つたのだが、困つたような顔をして返事を洩つた。家の主は「逃げられては困る！」と思い、大塔宮主従の笈（おい）山伏の荷物）を、預かると言つて屋敷内に取り込んでしまった。一行は其処に潜伏できたのである。

十日程過ぎた或る夜に家の主・兵衛尉が大塔宮や玄尊らの傍に来て、あれこれと世間話をした。其の中で、兵衛尉は心配そうに次の様に語つた。

「……御坊らは聞いて居られるであろうか？……大塔宮が熊野辺りに潜伏されたいが熊野三山の別当（統括責任者）である定遍僧都（そうず）僧正に次ぐ僧の位）は無二の武家方（幕府方）の人物であるから熊野に隠れることは無理と思われる。せめて此の里に來られたならば、場所は狭くとも四方が険しい山に囲まれているから鳥でも簡単に飛び回れない。その上に住民は純心で正義感に厚く武芸に通じている。かつて（源平時代にも）平清盛公の嫡孫・維盛と申された方が我らの祖先を待み、此の地に隠れて源氏の世を恙無く過ごされた……と伝えられている……」

是を聞かれた大塔宮は、嬉しさを隠し切れずに「……もし大塔宮などが此処を頼つて來られたならば協力されるのか？」と聞き返したところ兵衛は当然という態度で答えた。

「其れは言うまでも無いことで此の身は不肖なりとも私が一人で断言している訳では無く、此の

地の鹿瀬（ししがせ）、蕪坂（かぶらさか）、湯浅、阿瀬川、小原、芋瀬（いもせ）、中津河、吉野など十八郷に住む者は喜んで協力をするでしょう。」

この言葉を聞いて、大塔宮は近くに控えて居た本寺相模に目配せをされた。相模は兵衛の傍に寄って「…実は（今は隠す必要が無いので全てをお話しするが…）其処に居られる我らが先達（リーダー）こそ、大塔宮本人であられる…」と告げた。

然し、調子が良すぎる話なので兵衛は信用せずに一行の顔を疑うように眺めていた。すると大塔宮に付き添っていた片岡八郎、矢田彦七が「暑い」と言って頭巾を脱ぐ。本物の山伏ならば何度も頭髮を剃った痕跡が残るのだが、偽山伏の頭は理髪店に行つたばかりの様に初々しい。本寺相模の言葉は本当だと分かったから主の兵衛は後方へ飛び下がり其の場に平伏して無礼を詫びるしかない。

兵衛は屋敷の周囲を警戒したが防備が完全では無いので、地域を支配する叔父の竹原入道に此の事を知らせて大塔宮一行は竹原入道の屋形に移された。其処で山伏姿から元の公家姿に戻って暫く滞在することになった。大塔宮も偽坊主から皇族に復したから、入道の娘を寝所に侍らせるなど、愚かにも、すっかり其の氣になつていた。

そういう状況は漏らさなくても自然に伝わるもので話を聞いた幕府方の熊野別当が十津川へ攻め込もうとしたのだが、山深い場所であるから十万騎で攻めても叶わない！と言われ、地元民の欲心を利用して誘き（おびき）出すことを考えた。

周辺地域には木札が立てられて「潜伏中の大塔宮を討つた者には恩賞として伊勢に領地が与えられるほか多額の賞金が出る。宮の家臣を討つた者にも恩賞があるのは当然だが、もし降伏すれば宮

の家臣であつた者にも御褒美が与えられる…」という美味しい内容が掲示されたのである。更に其の恩賞の約束を神仏に誓う言葉が記載されていたから人々が興味を持たない筈が無く、大塔宮一行も安心して暮らすことが出来なくなった。

そうなる十津川にも居られないが行く場所も無い。竹原入道は信頼できても、其の子供や親族たちは賞金に興味がある。結局、或る夜に大塔宮の判断で一行は十津川を脱出し溪谷沿いに高野山へ逃げ込むこととした。然し、其の途中は小原・芋瀬・中津川などと言う街道の難所で而も幕府支配の地域である。そこで苦肉の策になるが最初から敵の懐（ふところ）へ飛び込む覚悟で、芋瀬庄を束ねる庄司の許を堂々と訪れてみたのである。

当然ながら庄司は驚いたが、一行を自分の館には入れずに街道沿いの小さな堂に案内してから改めて使者を立て、大塔宮に申し上げた。

「此の先には三山の別当（上席僧）である定遍（じょうへん）が幕府の命令を受けており、官方に協力する者を捕えては関東へ報告しておりますので此の道を無事にお通しする事が出来ません。そうかと言つて大塔宮を拘束する様なことは畏れ多いので、お供の中で余り名の知られて居ないお方に犠牲になつて頂き捕虜とするか、又は宮様の御旗（紋）を頂戴して、私が合戦をした証拠に幕府方へ届けたいと思います。もし、此の両案に御同意頂け無いのであれば、本意では有りませんが私が敵として抵抗させて頂きます…」

理屈としては尤もであるが、とても受けられる条件では無い。大塔宮は返事をしなかった。すると供の中から赤松律師則祐（「律師」は五位相当の高僧）が進み出て身代わりとなる意見を述べた。

「主の危険に身命を賭けるのは家臣の任務です。中国の史書（史記）にも紀信や魏豹（ぎほう）と言う、主君に代わつて敵に降り歴史に名を留めた者の記録があります。今は何よりも大塔宮に高野山へ無事に避難して頂くことが重要なのですからどうか私を身代わりにして下さい…」

是を聞いた平賀三郎が「…末座から意見を申し上げますが此の苦難の中で一人でも犠牲者を出してはならないと存じます。然し芋瀬庄司の言うことも無視は出来ません。それならば人質では無く、宮の御旗を差し出しては如何でしょう。戦場では馬・武器などを敵に奪われる場合も有るのですから、此の危難に御旗を失なつても恥辱にはならないと存じます」と申し述べた。大塔宮も「成る程！」と思ひ「錦の御旗」と称する金糸銀糸で日月を縫い付けた旗を芋瀬庄司に与えた。

こうして大塔宮の一行は其の地を離れることが出来たのであるが、暫くしてから一行に追いつくうとして村上彦四郎義光（…よしてる）という武士が芋瀬の里にやつてきた。見ると、庄司の家来が宮の旗を持つている。事情を聴くと有りの俵を答えたから義光は烈火の如くに怒り旗を持った男を十余メートルも投げ飛ばして旗を奪い返した。

其の怪力に恐れ荘司は抵抗も出来ない。義光は宮の一行に追いつき状況を報告したので、宮は平賀と村上の働きを古代中国の英雄に擬えて褒めた。其の夜は山中に潜んで仮寝をし、明けて小原へと向かう途中で焚き木を背負つた土地の者に行き逢つたので道を訊ねた。一行の様子から流石に身分の有るお方と判断した村人は背負つた荷を下ろし身を屈めて敬意を表し「…是より小原へお通りになる道筋には玉置（たまき）庄司と言う武家方

に忠義の人が居ますので、此のお方を説得しなければ幾ら大勢でも無事には通り抜けが出来ないと思います。差し出がましい様ですが、先ず数人で庄司の意向を確かめられる事をお勧めします」と言った。是を聞いた大塔宮は「：確かに此の者の申すとおりである」と感心して、片岡八郎と矢田彦七の二名を庄司の許へ使者として遣わした。

二人は交渉に行ったのだが、最初から卑屈な態度を見せたのでは足元を見られると思い「大塔宮が此の街道を通られる。木戸を開き障害物を撤去するように：（宮が仰せである）」と申し入れた。其れを聞いた玉置は返事をせず屋敷内に入ったが、やがて家来たちの動きが激しくなった。

片岡らは「説得が叶わない！」と判断して足早に引き返そうとしたのだが既に五、六十名の玉置軍勢が追い掛けて来る様子である。そこで数本ある松の蔭に身を潜めて居て先頭を進んできた騎馬武者の馬を狙った。気の毒なのは馬であるが脚を斬られたから倒れる他はない。乗っていた武士も馬に合せて転倒したところを今度は自分の首を斬られてしまった。後続の武士は是を目の前で見ながら追跡を止めて矢を放ってきた。

片岡八郎は二本の矢を身に受けて、是は助からないと思ひ矢田彦七に「矢田殿、私は重傷なので此の場で討死する。貴方は速やかに此処を離れて宮様始め一同を脱出させるように！」と言った。矢田も討死を覚悟していたので躊躇したのだが、此の危急を大塔宮に知らせなければ：とも思ひ、涙ながらに重傷の友を残して脱出した。其の心の中を察するも哀れである。暫く走ってから振り返れば敵は片岡を討ち、其の首を太刀の先に貫いていた。矢田は其のことを大塔宮に報告したので一

同は逃れられない危機に直面したことを覚つたけれども対応策は浮かばない。此の地には留まれず行く当ても無いが、行ける所まで行く他は無いの三十人ほどしか居ない兵士を先に立てて知らない土地の山中を進んだ。中津川の峠を越えようとした時に多数の軍勢が前方の山に布陣している様子が見えた。村人が言っていた玉置の軍勢らしく五、六百人が完全武装で攻撃態勢を整えているから友好的では無い。是を見た大塔宮は自嘲的に笑って壮絶な最後の決意を述べた。

「：手持ちの矢が有る限り防戦してから心静かに自害をして後世に名を残そう。私より先に（諦めて）死んではならない。私が自害したならば顔の皮を剥ぎ、耳と鼻を落とし、誰の首か分からぬようにして捨てるように：其の訳は、もし私の首が敵の手に渡り獄門に掛けられる（晒しものにされる）ことになれば、朝廷に味方する諸国の武士を落胆させ、幕府は益々権力を振るうであろう：「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という諺もある。死後も威を天下に残すを良将と言う。今は逃れられぬ場面であるから、全力を尽くして戦い敵に笑われない様な最後にしよう：」

それを聞いた供の者たちは「：敵に卑怯者などと言わせるものか！」と、大塔宮の前に立ち並び敵陣へ向かった。然しながら其の兵力は僅かに三十数名。「一騎当千」と言っても戦いようが無い。然も、五百余の敵は完全装備で近づいてくる。

万事休す、と思われた其の時、北側の峰に赤旗が三本ほど見えたと思うと六、七百騎の軍勢が姿を現わした。此の軍勢は近づく程に三手に分かれて鬨の声を挙げながら玉置庄司の軍勢に向かって行ったのである。真つ先に進んだ武士は「：紀伊

国の住人、野長瀬六郎、同七郎、三千余騎にて大塔宮をお迎えに参るところに忝（かたじけなく）も此の君に敵対して弓を引き楯を連ねる者は誰ぞや！玉置庄司殿と見るは僻目（ひがめ）偏見（へんけん）か。今の時代に滅ぶべき武家の命運に従い将来の運を開かれる親王に敵対して天下の何れに身を置くつもりか知らぬが天罰は近い将来に下るぞ！其の方らの如き不屈者を討つ我らに勝利の機が有る。逃すな！」と叫んで突進してきた。其の勢いに恐れられた玉置勢は楯を捨て旗を巻き逃げるしかない。

野長瀬兄弟は兜を外し弓を抱えて宮の御前に平伏した。危急を脱した大塔宮は野長瀬に「逆徒の大軍に囲まれた中でなぜ私の危急を救ってくれたのか？」と訊ねると、野長瀬は「昨日の昼頃に老松と名乗る十五、六歳の少年が現れて：明日は大塔宮が十津川を發たれ、小原へ向かわれるが途中で難に遭われる。忠義の志有らば御迎えに参れ：と触れ回りました。それで宮のお使いかと存じ、参上したのです」と答えた。

不思議な話なので大塔宮も思案していたが何気なく肌身に付けていた北野天神のお守りを手にしてみると、その口が少し開いていた。中から鑄造品の小さい御神体を取り出してみると、汗をかき、足に土がついていたのである。嘘の様な話だが、嘘であろう。それでも神の御加護を信じた大塔宮らの一行は、地元の榎野（まきの）上野房聖賢の城へ入ったのだが、手狭なので三千を擁する吉野の僧兵を頼って其処へ移られたという。

続く